

平成16年9月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 0428-23-6859）

## 和紙のいろいろ

古文書にはいろいろな和紙が使われています。日本に紙の製造法が伝わったのは、推古18年（610）高句麗の僧曇徴（どんちょう）によるものとされています。

聖徳太子は仏教を広め写経を奨励するために製紙術を高め、楮（こうぞ）を増産したと伝えられています。世界最古の印刷物として有名な「百万塔」は、宝亀元年（770）に6年の歳月をかけて100万基作られました。それらに納められた『陀羅尼経』は、楮・雁皮（がんび）など様々な紙を使用しています。

紙の製造が始まった頃の原料は麻が主体でした。麻の繊維は楮よりも長く幅広いので、小刀で繊維を適当な長さに切るのが大変で、出来た紙も平面を平滑にするため表面を木槌で叩く打紙加工か、猪の牙で磨いたりして、紙面を平滑にしなければなりません。このように造り難く、書写し難いものでした。そこで、身近に自生していた楮が麻に変わって原料になりました。楮は麻より繊維が短く白くて、紙の表面も滑らかでした。また雁皮も使われるようになると、雁皮繊維は楮よりさらに短く繊維同士が結合し易いので、きめ細かい和紙になりました。雁皮にはネリの成分に近い物が含まれており、繊維が均一に広がりやすい特徴があります。そこで、原料液を粘っこくするものを使用するという発想が生まれ、麻や楮でも「黄葵（トロロアオイ）」や「糊空木（ノリウツギ）」などの粘液を添加することにより、水切りが悪くなり、すき簾を揺すって水切りを助けると共に繊維を均一に広げる「流し漉（す）き」という日本独特の作り方が出来上がりました。和紙には楮紙・雁皮紙・三桎（みつまた）紙・麻紙・竹紙・継紙・檀紙・千代紙など色々ありますが、特に代表されるのが楮紙・雁皮紙・三桎紙です。日本で製造された最古の紙は、奈良の正倉院にある大宝2年（702）に筑前・富前・美濃で作られた戸籍で原料は楮です。

### 『楮紙』

原料である楮はクワ（桑）科の植物で、種・根分け・枝分け法の何れによっても生育する強い成長力を持っています。奈良時代には「穀紙」と呼ばれ、古今を通じ紙の原料の大半を占めています。栽培と紙作りが比較的容易である事と、あらゆる用途に適している事などがその理由に考えられます。楮の繊維は他の原料と比べて太く長いので、全体的に最も和紙らしい感じを受け、厚い楮紙は強靱な感じを、薄い紙はしなやかで柔らかい感じを受けます。用途の最たるものは書写用や木版印刷用であり、次に障子紙、続いて傘紙でした。江戸時代には、提灯・あんどん・扇子・団扇・凧・双六・千代紙・襖の他、宗教・祭礼・儀礼・茶道用など100を超す用途に加工され使われました。

「谷合氏見聞録」にも元禄 14 年（1701）に樹木桑・漆・楮が、また、享保 6 年（1721）に樹木漆・楮が嵐にあった事が記されています。

### 『雁皮紙』

原料である雁皮はジンチョウゲ科の植物で採算性から野生の皮を使用しました。古代では「斐紙」もしくは「肥紙」と呼ばれ、その美しさと風格から紙の「王様」と評されました。繊維は細く短いので緻密で緊密な紙となり、紙肌は滑らかで赤クリーム其自然色（鳥の子色）と独特の好ましい光沢を有しています。雁皮は粘液性がある為、紙を漉く時の水垂れを悪くしました。また、多くの水気に接すると収縮して紙面に小皺を生じる特性があるので、かな料紙・写経用紙・手紙などの細字用として使われました。平安時代には厚さによって厚様・中様・薄様といわれ、やや厚めの雁皮紙を「鳥の子紙」と言って、越前産を最上としました。将軍が藩主に下付する領地目録は、極厚の雁皮紙が使われました。日本画用や高級襖紙にも使われ、薄い雁皮紙はかつて謄写版の原紙として一世を風靡しました。

### 『三桠紙』

原料である三桠はジンチョウゲ科の植物で、それぞれの枝が 3 つに分かれているところから付けられた名前です。楮・雁皮が古代から使われていたのに比べて、三桠は桃山時代（1568～1600）後期から使われ始めました。慶長 3 年（1598）三須家文書の 3 月 4 日付、家康公黒印状が三桠紙の初見とされています。三桠の繊維は細かくて短く雁皮に類似していますが、雁皮よりやや大きく紙面も平滑です。雁皮が野生に頼るのに比べて三桠は栽培が可能であることが三桠の需要を大きくしました。鳥の子紙も造るようになり、世界で最も上質な紙幣として、耐久力と美しさを誇っていましたが、現在では、ほとんど使われていないようです。

春、梅の咲く頃オレンジ色がかかった黄色の花を付けた三桠の木を梅の公園周辺を初め、市内各地の庭先で目にすることが出来ます

（文責 儘田 小夜子）

